鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第５０号

１９８９年９月１１日

震災誌　　塩沢務

鵠沼を語る会

はじめに

9月1日は『防災の日』

毎年藤沢市は総合防災訓練が片瀬中学校（校庭）実施される。

地震その時の心得１０か条　（ふじさわ広報より）

１，グラッときたら火の始末。　２，戸を開けて出口を確保。

３，テーブルの下に身をふせる。　４，あわてて外にとびださない。

５，火が出たらすばやく消火。　６，室内のガラスの破片に注意。

７，わが家の安全隣りの安全。　８，協力しあって応急救護。

９，門や塀には近寄らない。　１０，正しい情報で行動する。

９月の例会で『特集号地震誌』発行しました又地震防災課より係の方に例会御出席戴き「昭和６１年８月１１日伊豆大島の噴火と平成元年７月１３日伊東市海底噴火」について体験講話をお願しました。

「鵠沼」第５０号震災誌目次

１，藤沢町震災誌（鵠沼編）藤沢小学校校長仙田四五郎氏（ 1-10)

２，白土しな氏（元東久邇宮女官長）の手紙　(10-11)

３，岸田劉生日記（抜粋）大正１２年９月１日　(1-11)

４，鵠沼物語（震災編抜粋）今井達夫氏（鵠沼作家）　(1- 5)

５，震災年表（神奈川県内主に）「孝安年代ー昭和５年」(1- 7)

資料出典　防災化学技術研究　神奈川県災害誌　神奈川県年表

吾妻鏡　大日本年表　日本史年表

藤沢町　震災誌，　（鵠沼編）

藤沢小学校校長仙田四五郎先生編　　塩　沢　務

大正１２年９月１日１１時５８分関東大地震東京、神奈川、千葉、埼玉、静岡、山梨、茨城、群馬、長野の各県に烈震、その上、火災と津波により、神奈川、東京に被害著しくなる（相模湾北部）Ｍ７，９最大震度６（烈震）東京、横浜、横須賀、富碕、熊谷、鎌倉、甲府。東京以西神奈川県北方は沈降し房総方面は全部隆起。（神奈川県災害誌より）

惨たる藤沢町の被害

１，　学　　校

藤　沢　小学校	全　潰
明　治　小学校	〃
鵠　沼　小学校	〃
藤　沢　中学校	全　焼
湘南実科女学校	半　潰

２，　官　　衛

高座郡役所	半　潰
藤沢郵便局	全　潰
藤沢停車場	〃
辻堂停車場	〃
藤沢警察署	半　潰
藤沢町役場	〃
藤沢税務署	〃
登　記　所	〃

３，　神　　社

郷社　大庭神社	全　潰
諏訪社　（藤沢）	〃
諏訪神社（辻堂）	拝殿倒潰
皇　大　神　宮	〃
御霊神社（羽鳥）	半　潰
白旗神社	鳥居太鼓橋其他末社崩潰

４，　寺　　院

遊行寺	全潰	感応院	半潰
妙善寺	〃	成就院（大庭）	全潰
永勝寺	〃	泉秋寺（大庭）	〃
真源寺	〃	宗賢院（大庭）	〃
荘厳寺	〃	宝泉寺（辻堂）	〃
常光寺	半潰	法照寺（鵠沼）	〃
		慈教庵（鵠沼）	〃

5，銀行会社工場其の他

株式会社関東銀行	全潰	藤沢製氷会社	半潰
同　藤沢支店	〃	関東下駄製造株式会社	全潰
相模製粉株式会社	〃	藤沢町立避病院	〃
東海醤油株式会社	〃	藤沢療養所	半潰
徳増製糸会社	〃	精麦倉庫株式会社	〃
大日本醸造株式会社	〃		

道路の被害

地震のために亀裂を生ずるとか土地が陥落するとかいふことは昔のこと書簿の上に現われているだけのことばかりと思っていたのは間違いであった。割れるなどとは夢にも思っていなかった大地が、僅か数分間の地動で所々方々に亀裂を生じた。国道も県道も里道も、至るところ被害を蒙った。殊に川沿いの道路や田圃中の道路はひどいものであった、左に本町に於て最も被害の多かった箇所を挙げて見る。

川岸の県道

震災後9月9日の新聞は本町の被害状況を報じて次の如くにいって居

る。『藤沢町は半数壊滅の状態で、残存家屋も旧形を保っているものはない。東海道筋に当る町中央部の橋は陥没し辛くも通行し得る程度で其の付近の惨害が最も甚だしい、火に見舞はれなかったため８日頃より商いをはじめたものがかなりある。死傷者約百名青年団が活動す。』

全く大鋸橋付近の惨状といふものは目もあてられなかった。川沿いの県道は一町半程の間、崩壊して立並んでいた家と一処に、川の中に崩れ落ちてしまった。平であった道路に上つたり下がったりの坂が出来てしまった。震災後当分の間は馬車の通行は困難であった。藤沢劇場の近所も大分ひどくなった。新道と庚申堂との境のところが四五尺程陥落して自転車でなど気無しに飛ばすのはとても危険であった。

石上から鵠沼海岸に至る町道

此の道路のうちでも殊に酷くなったのは、川袋の電車停留場から線路に沿うた二丁程の間である、前にも述べた通り、酷くなった箇所は川の側とか田圃中とか比較的地盤の脆い所であるが、この道路も非常に地盤がよくなかった、一方は田圃、他の一方は旧の境川此の間に電車の線路と道路とが並行して造られていたのであったが、それにもせよ、あの惨状を見ては誰でも吃驚しないでは居られない、水の面よりは一間半程も高かった土砂がすべり、広がって殆ど水面と等しいまでになってしまった。旧境川の中には緑の葦が生い茂って居たのだが、すべり込んだ土砂の為に半は埋められてしまった。そして道路は形もなくなってしまつた

鵠沼海岸の惨状

藤沢町が鵠沼海岸別荘地を持って居ることは将来発展の為にどんなに力強いことであったか知れない。数年前までは別荘の数もごく僅かであ

ったが、近々５，６年の間に非常な発展をした、京浜の人々が争って別荘を造ったので其数はやがて六百にもなろぅとする勢いであつた。殊に今夏は東久邇宮妃殿下の御避暑．久邇宮良子女王殿下（新皇太后）のご来遊等先例のない光栄に浴したので、土地の人々は勿論、町としても非常に喜んでいたのだ、然るに噫！大地一たび震動して後の鵠沼海岸は見る影もない有様となった、思へば思ふほど残念である。震災後の一日、私は此の海岸別荘地の様子を見に行ったことがある。電車を下りてあちらこちら歩いて見たが実にひどいものだ。地面は到るところ隆起し陥没し亀烈を生じて激震の当時をありありと物語っている、白い砂の上に枝ぶりよく栄えていた松は右に左に傾き倒れて根をあらはしている。緑松の間に点々と散在していたきれいな建物は殆んど全部といひたいまでに潰れている四辺の井戸や池は下から噴き出した砂で大ていは埋つていた。地震の時には井戸や池ばかりでなく海岸一帯の土地がぶくぶくに弛んで到るところから水を噴き出したそうである。『鵠沼海岸は方々から水が噴き出して大洪水だ』といふのがあの当時専らの噂であった。津波は話程ひどくはなかったらしい。海岸の砂山が流された位のもので、他には別段これに侵されたらしい所も見えなかった。別荘の人々はいづれへか引上げてしまったらしくどこを歩いて見ても人影が少ない。何となく心細い感じがした。然しあくまで踏み留まって此地の為に奮闘しやぅとしている人もあると聞いて非常に心強く思って帰った。

希くは再生の鵠沼海岸に幸多かれ！

鵠沼海岸自警団の奮闘

鵠沼海岸自警団は、今から約一年前に組織された一自治団体であって

今度の震災によって突然に生れた所謂自警団なるものとは全然色彩を異にしている。過去一箇年の訓練が効を奏して着々成績の見るべき者があった。団長は有田金八、副団長は中野一郎、此の上に顧問広岡助五郎氏があって、専心此の自治体の発展に腐心されていた。本年七月、東久邇宮妃殿下が、当町鵠沼海岸なる吉村別邸に御避暑遊ばさるゝや、自警団は光栄此上もなしとて毎日団員二名づつをして、これが警護の任に当らしめた。七月八月あの海辺に遊んだものは誰でも海水浴場の付近を巡警する制服姿の自警団員を見たことであろう。

家を捨て妻子を捨てゝ急遽宮家へ

9月1日、正午、突如の大震は此の地を襲ふた。其の瞬間電の如く団員の頭に閃めいたのは宮家の御事である。団長有田金八、副団長中野一郎他に関根吉五郎、菊地清次郎の四団員は、倒れたおのれの家を捨て、泣叫ぶ妻子を其まゝにして急遽宮家へと走ったのである。時既におそく吉村別邸はもろくも倒潰して、妃殿下を始め奉り、王子方侍女ことごとく下敷とならせられているのであった。御側附の方々は気をいらつて御救助につとめやうとしたが、あまりに突然の変事なので道具といつても見当たらず暫しは如何ともなす術はなかったのである。駆けつけた自営団員は挺子よ、きりんよと走りまはつた。幸にも妃殿下は、階上の御間に居らせられたので、微傷だも負はせられず御救ひ出し申すことが出来た。先づ一安心と息つく暇もなく実に渾身の力をつくして王子殿下の御救助に努めたのである。もう少しという其の刹那、遙に襲ひ来る海鳴りの響き、妃殿下も危ないと御懸念遊ばされた御模様であったが、もとより死を決した人々である。海鳴物かは、と押し寄せる潮をながめ乍らも

挺子持つ手を弛めなかった。苦心惨憺、暫くにして御出し申したが、何たる御痛はしい御事であらう。此の時既に師正王殿下には壁間に御窒息遊ばされ眠れるが如き御姿で永の御旅に御成の後であった。母宮殿下の御心中や如何に？たゞ御存命なれとのみ祈った人々も、あまりの御いたはしい、有様を拝して、涙の袖をしぼらぬものはなかった。

団員のおんぼやき

鵠沼海岸は、此の付近としては、最も惨害を極めた場所であって、地震の程度も余程ひどかつたものらしい。僅かに海岸別荘地だけで圧死者４７名を出したといふ。秋とはいふものゝ９月１日、まだ避暑客の余程多かったあの日、突如の激震に家は倒れ海鳴は襲い、老若男女は幾百人となく家の下敷きとなった。救いを求むる悲鳴の声は各所に聞えてさながら阿鼻叫喚の巷となった。日頃訓練された自警団員は、すはこそ一大事と手に手に挺子をふるって彼方に此方に走りまはり人命救助に努めた殊に不幸な変死者の死体処置に至っては涙の出る様な美談が残されている。当日午後３時、あの恐怖混乱の中に早くも、広岡家の門前には、死体取扱所と記された札が立てられていた。前後に迷ふ変死者の遺族等は何処にと便るべき所もないので、皆此の立札を目がけて集つて来た。
広岡家の門前は一時これらの人々で大混雑を極めた。団員は夜を徹してこれ等死体の納棺につとめた。驚くべし、翌二日の正午頃には四十七の棺箱が、づらり海岸大曲なる一広場に並べられた。何処の葬儀屋へ駆け付けても棺箱が間に合はぬ。親が死んでも子が死んでも二日も三日も其の儘にされていたあの時、あの際、この目覚ましい奮闘は、実に感服の外はない。団員遺族御通夜のうちに二日の夜は明けた。死者を弔う涙の

雨三日の午後の海岸はまことに淋しいものであった。並べられた四十七の棺箱からは異様な臭気が漏れ始めた。顧問広岡氏は之を案じて、遺族の人々に図ったが、感涙にむせんでいる遺族はただ、『何分よろしい様に。』との外、何の言葉もない。こゝに於て広岡氏外団員一同は決然として起った。『よし、それぢやあ焼いてしまひましう。私どもにまかせて下さい。』かう言って其翌日、四十七の死体をいと鄭重に茶毘にふしたのである。団員は汗を流して遠い本村から二千杷の薪を担いで運んだ堀川部落の葉山又兵衛氏は、此美挙に感じて部落の消防組合員数名を派遣して、これが援助に力を貸された。愈々茶毘にふされるという時には遺骨の間違ふことをおそれて一々しるしがつけられた。浅野佐藤二巡査は熱心にこれを監視された。これを本所被服廠跡の枡測りの骨に比ぶれば如何程幸なことであつたか知れない。一朝無常の風に見舞はれて黄泉の旅におもむいた四十七の魂もどんなにか満足して其の足を運んで行った事であろう？翌５日、遺骨を受取るべく集った遺族は、至れり尽くせりの此の始末には、唯感涙にむせぶのみであった。此の他、自警団は、宮家の御警護、食料の配給、夜警等、すべてにつて遺憾なき活動をした７日の夜１２時、宮内省から御使いがあつて、翌日８日、宮家御帰京との報を受けた時など、連日連夜の活動に身も心も疲れはてているにもかかはらず、夜中、彼方此方と駆け廻って舟を探し歩いたのである。つなみの為に海岸の舟は殆ど流失、又は破壊されてしまつていたのだ。宮家の方々を駆逐艦まで御送りする端舟がなかったので探廻った訳である。東久邇宮家におかせられては、かうした自警団の活動を、至極御満足に恩召され、御帰京後間もなく、感謝状を賜った。

感　謝　状

当宮妃殿下ニハ盛厚王師正王彰常王三殿下御同伴相州鵠沼海岸所在衆議院議員吉村鉄之助別荘ヘ御避暑御滞留中即大正十二年九月一日午前十一時五十八分頃大震ノ瞬間家屋倒潰各殿下御遭難アラセラレタル際其他自警団員ハ自家ノ危急ヲ顧ミス迅速現場ニ駈ツケ宮職員ト共ニ救護ニ盡力且ツ諸事応援便宜ヲ与ヘラレタル段御満足ニ被思召候条此段御挨拶申進候　　敬具

大正十二年九月

東　久　邇　宮　附
宮内事務官　　金　井　四　郎

鵠沼海岸

自　警　団

御　　中

他ニ宮家御紋章入大銀杯一個

金壱千弐百圓御下賜

本誌編集委員は、震災後の一日此の美しい事実の詳細を尋ねる為め、顧問広岡氏を訪ねた。邸内足の踏みば場もなき乱雑の中に、氏は何やら片付け事をして居られたが、心よく我々を迎へていろいろと話をかはされた。日に焼けた氏の顔は連日の奮闘を語るものの如く、輝き光って見えた。氏は引きしまつた口をおもむろに開いて、次ぎの様に語る。

『いえ！自警団といっても今度の事は自警団ばかりといふ訳ぢやないのです。青年団、自警団、其の他居住民全部の働きなのです。え！自警団の創立ですか？それは昨年の十月頃でした。まだ西坂署長の居られる頃

で、いろいろ御盡力に預りました。名称こそ自警団といって居りますが実を申しますと、団員の大部は青年団員で、中若干名の在郷軍人が居ります。いはば青年団、在郷軍人会の変形といつたやうなものですね。

修養ですか？此の方面は取立ててやってるといふ程の事もありません、創立当時から五参会といふのをやって来ました。毎月五の日に会員全部が集会して、意見の交換をするのです。時には名士を招いて講演をして貰うといふ様な事もやって来ました。今度の変事に際しましても、比較的秩序立つて働けましたのは、今までのこんな催しが、幾分役立つているのかも知れません。会則？会則といってもあるにはありますが、そぅ大した成文はないのです。所謂親分子分とゆう様な関係から成立つて居りますので、幹部の命令に良つて気持よく働いて行きます。創立の当初は幾分、不純な分子も見えましたが現在では、殆んど共同一致して世話なしに働いて行くやうになりました。まあ此の點だけは自慢出来るかと思って居ります。宮家の御遭難？いやもうこれに尽きましては会員一同全く恐懼して居る次第です。七月以来、専心御警護に努めてはきたのですが、天災とはいへ今度のやぅな御遭難、何とも申し上げる事が出来ません。然るに宮家からいと御鄭重な感謝状、其上多額の金圓まで賜りまして会員一同、今更乍ら宮家の御厚情に感激して居ます。

在住者に対する災後の応救策としましては大体次ぎのやぅなことです。宮家御滞在といふ縁故で静岡県知事から白米五十俵、食塩二十俵の見舞を受けましたので、これを第一回として配給いたしました、其後、宮家御下賜金の内を幾分さいて、白米の配給をやって居ります。現在は軍隊と協力して夜警を努めている位の者ですが及ばず乍ら、今後も復興事業

に献身的努力をいたす覚悟で居ります。』語り終へた氏の面には、赤い血潮が漲つていた。

藤沢町震害

	所帯数	死者	計	重傷者	軽傷者
全焼	1	男　女		男　女	男　女
全潰	1，099	25　40	65	29　28	28　47
半潰	1，219	8　6	14	7　6	20　18
流失	6	2　3	5	2　0	1　5
計	2，325	35　49	84	38　34	49　70
破損	889	9　8	17	1　1	9　10
無破	224	1　2	3	1　0	1　2
計	1，113	10　10	20	2　1	10　12
		45　59		40　35	59　82
合計	3，438		104	75	141

以上

白土しな様（元東久邇宮女官長）の手紙

誠に失礼乍ら存じませぬ御方様より御手紙頂き何度も何度も私宛かと調べましたが間違いなく思い切って開封致し拝見致しました処思出の鵠沼とわかり有りがたく拝見いたしました。志かし今はもう亡き人ばかりにてあの時の事を聞く人もありません私も九十歳になりまして思出もうすらぎ記事にして頂くほどの事も書けませんから如何致しませうかと思いましたが一筆丈御送り致します。

御覧の上よろしき様に願上ます、大変おそくなりまして御許し下さい

白　土　しな

塩沢　務様

妃殿下が御子様を御つれ遊ばし鵠沼吉村邸に御避暑になり毎日海岸にて水泳を遊ばし楽しい日々で御座いました。前には大きな池もあり広い広い御家でした。九月一日午前十一時すぎ突然地震が起こりゆらゆらゆれ初め段々と強くゆれ出ました地震の大きらいな妃殿下広い二階をあちこちと歩かれ梯子段の方に御出でになりますから梯子段は駄目ですよと申ました処帰って御出になり食堂に御はいり遊ばしたかと思ふとたんに家が全部こわれてしまいました。宮様は其下敷となり片足が屋根をつきやぶりひざから下が外へ出て居りました。志ばらくすると役所の人が宮様宮様何処に御出て？、と大声で呼びますから宮様はここですよと私も大声で申ました処アヽ足が出て居ると急ぎ其足を引っぱりました処宮様が痛いよと申され中止致し家根をかかえてもらい其間から、はい出しました二階だから、どうして降りやうと思ひました。ペチヤンコになり地面続きでした、宮様の足の血を洗って上やうと恩ひ井戸がありましたから水をと恩ひました処水はなく土がもり上って居るのに驚き其ま行かうと思ひました処津波が来るとの事に又々驚き、たをれた家根の上を通り安全な処迄にげのびました何と申される内でしたか忘れましたが後から後から皆々ここに集まりました。師正様は外に御出てにて家の下敷になって亡くなられ御用取扱は梯子段の処で亡くなられました。妃殿下の所に御出でになる御つもりでしたでせうと御気の毒に存じました、もう一

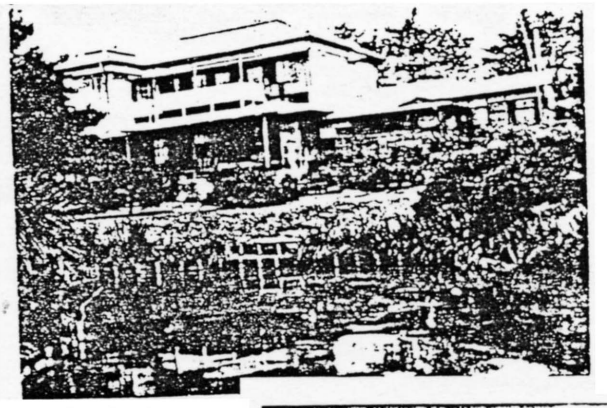
人御次の人で（きよ）と云うのですが押入の中に入りつぶされて亡くなりました。此方々も皆、妃殿下が御出になりましたお庭に運び込まれ一夜を明かしました。翌日は船に乗り東京の港へ上陸自動車で市兵衛町の焼残りの家に御帰へりになり、それから師正様の葬儀などすまされた後伊香保の御用邸へ御出でになりました以上の様な事しかおぼへて居りません。

昭和五十六年六月十二日

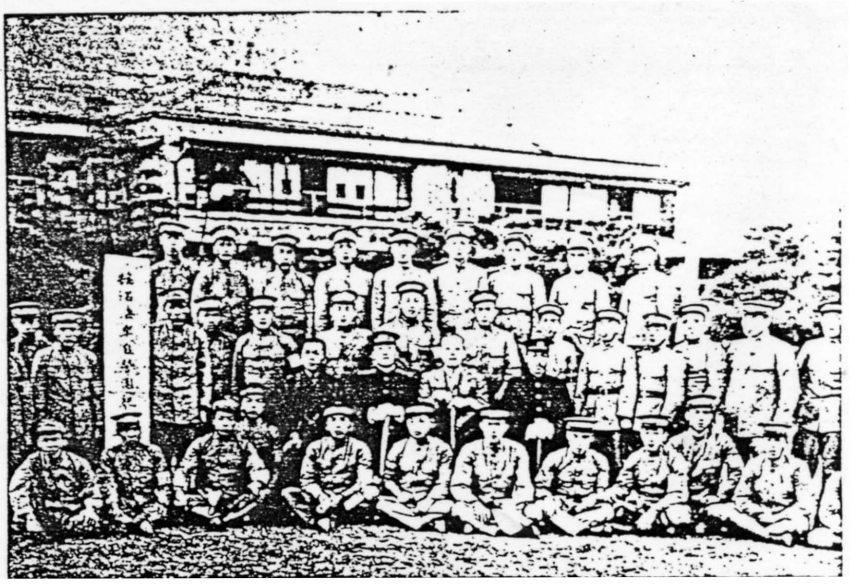
群馬県榛名町中室田恵泉園

白　土　しな

吉村別荘



鵠沼海岸2-11



鵠沼海岸自警団

岸田劉生日記（抜粋）

大正１２年９月１日（土）雨後晴、

今日といふ日は実に稀有の日である。恐らく安政以来の大地震とも云ふ可き大地震があって、湘南、横浜東京を一もみにつぶしたのである。この日は、朝の中仕事にかゝらず、蘂と茶の間で花合せなどしていて余がまけて、少しかんしゃくなどおこしているところであった。十二時少し前かと恩ふ、ドドドンといふ下からつきあげる様な震動を感じたのでこれはいけないと立ちあがり、蘂もつゞいて立つて玄関から逃れやうとした時は大地がゆれて中々出られず蘂などは倒れてしまった由、とも角外へ出るとつなみの不安で、松本さんの方へかけ出さうとすると照子が大地になげつけられ松の樹で眼をやられたとて蘂がかゝへて血が流れている。あゝ何たる事かと胸もはりさける様である。家はもうその時はひどくかしいでしまった。もう鵠沼にもいられないと恩ったがすぐ、これでは東京も駄目か、大へんな事になってしまったと恩ふ。つなみの不安でとも角も海岸から遠い高いところへ逃れやうと傷ついた照子を蘂かゝへて麗子は小林がおぶって一時購買屋のところで落ちついたが不安なので山へ逃れやと行く。横堀があとから来たのには助かった。横堀に照子をまかせて逃れる。田の中に腹迄つかって、逃れくる。地面がゆれ、われて、あぶない。電線が、ひくゝなっていて電気が通っているかもしれない。実に不安である。やっとのがれて、藤沢の遊行寺か、武相へ行かうとしたら途中石上の御百姓家へ呼びこまれた。非常に親切な家で、実に助かった。鈴木といふ米屋さんで、今の世に珍らしい人々の家族だ。この家の事は永く永く忘れまい。再生の恩人である。照子をねかしひや

してやる。五号の奥さんや子供も避難して来て一所になる。とも角も地震が不安なので、地面に、板を敷きござを敷き夜は蚊帳をつってくれる横浜は全滅東京も駄目等の悲報来る。西郷さんたち、原さんたち三渓園の無事を祈る。照子の眼心配也安全を祈るのみ。あゝ今日は実に何といふ日であつたらうか。只々神に罪を謝し、御守りを祈るのみである。

9月2日（日）晴

暁方、螺子工場が焼ける。不安也。ぢき村の人たちによって消されたが、ゆりかへし、つなみの不安去らず。小林横堀鵠沼へ行ってみて来る小さい男の子のおぢいさんというのが来て子供と会った時は涙がこぼれた。母親や赤ん坊たち皆たすかった由、本当によかった。感謝したい気がした。五号の奥さんたちは鵠沼へ帰るとて去られた。昨日の時間に少し大きなゆりかへしあり不安の中に過ごし、合掌し、神に祈る。照子の眼をみてもらふため照子つれて藤沢行く。小林も同行也。浪ちゃんに会ふ。小池さんといふ御医者様に行く。照子の眼の安全を祈りつゝ聞いたら眉毛のところを切ったゞけであとは打撲のあざがあるのみ眼は安全の由、只々感謝の外ない。帰りには浪ちやんの母さん妹たちに会ひ互に安全を喜ぶ。石上に帰る。午后より、朝鮮人が、暴動をしていてせめて来るといふ。恐怖に恐怖なり。米屋と恩はれてはといふので炭俵を裏へ運ぶのを手つだふ。家の裏に丸太とトタンにて仮小屋をつくり床をつくりゴザを敷く。鮮人の不安ますます強く、金をうづめやうとか食品をかくさうとか、いざといふ時どこにかくれ様とか、又小林等はふせがねばならぬ故とてモリや刀などの武器を出したり夜に入ってもますます不安也あゝ神よ守り給へ。照子の眼の助かっていた事は万一の幸と恩っていた

事で実に実に感謝の外ない。神よどうぞ御守下さい。しもべたちの運命と幸福、人々の幸をどうぞ御守り下さいまし。

9月3日（月）強雨あり、

朝早くめざめる。石上の鈴木方の裏の野天につくつた仮小屋の中也。朝食後（白米にぎりめしをつくってくれるがもったいない気がする）蓁小林横堀たちと鵠沼へいろいろとり出しに出かける。鵠沼は中々ひどくつぶれていた。二三日前写生しやうとて歩いたところ今はひどくくづれている。松本さんでは門のところへトタンの屋根をつくりござを敷いて住んでいられる。御茶をもらふ、大へんうまし。こわれた家からはいろいろつぶれたと恩った惜しいものが完全又は半完全で出る。蓮杖作の父の像や、支那の籠麗子のおもち等出る。二階へ丁度来ていた八百徳が上ってくれて軸を出したが皆完全、神よ守り給へ。これを安全に持つ事が出来ます様に祈るものである。蓁や余のいゝきものをたんすから出していたら雨がふって来て畫室へ入れる。雨がだんだんひどくなり少し荒れ模様となる。五号の家へ皆避ける。やうやく雨もあがりかけたので、丁度夏トンビと雨コートが出たのでそれを着て石上へ帰る。石上ではトタンの小屋をこわして、主家の方に入っていた。晩めし後早く床に入ったが屋根の下へねる不安で眠れなかった。神よ守り給へ。あゝ神よ守り給へ。この家の娘が奉公に行っているといふ、家族の人が避難していたがその御主人が東京から夜帰って来られ皆大喜びしていた。感謝する。東京の様子など聞く。不安也。兄弟親類小林の母姉たち子供など、友人木村清宮などの安全を祈る。神よ守り給へ。神よ守り給へ。

9月4日（火）晴

石上の鈴木氏方にてめさむ。地震以来第四日目也。昨夜は不安にてよく眠れず。あれ以来はじめて屋根の下にねたる事なれば也。それにこれからの事が心配にて心暗くなる。神よ守り給へ。まだまだ地震、つなみ等の不安とれず只々神様にすがるよりない。めしをすます。鈴木方では米のめしをくれてよくしてくれる。感謝に耐へない。横堀に食料を買って来てもらひ、蓁、麗子、小林横堀にて又鵠沼の家へ来る。広岡さんが助かっている様に聞いたので軸物をたのまうかと思った。広岡さんの家もこわれてしまった由で天幕の中に夫人子供さんたちがいた。御気の毒であった。二宮さんへ蓁と行く。二宮さんでは温室と物置がつぶれなかったのへ丸太と戸板で床をして畳をしいてすんでいられたが結局、物置の方をかたづけて床をつくり畳をしいて拝借する事になる。石上にさういるのは気の毒なのと鵠沼にいれば地震つなみがなければかへって気丈夫なのとで也。神よ守り給へ。宮様の金井さんへ御見舞に行って来る。それから、二宮さんの御父様と小林と余とで物置に入って、地震のために壁など落ちているものをかたづける。シヤベルやくわで、働く。それからこわれた主家の中へ入りこれも壁などの落ちている畳を上げて運ぶ仕事中照子麗子が石上で土地のものを収容しなくてはならぬといふのでことわられたとて来る。尤の事也。石上の人たちには全く、深く深く感謝しこの恩は忘れたくないものと恩ふ。永く永く。千葉清氏来らる。東京の模様など聞く。どうぞ、小林の母姉たち、子供岸田の弟たち、嫂たち子供たち、皆無事でいてくれる様に、木村、清宮、河野、尾高、其他愛する友の上に無事を祈る。神よどうぞ御守り下さい。夜迄かゝってと

もかく住家を造る。蓁小林、横堀、石上に行き食料其他のものもって引き上げて来る。松本さんで湯を立てゝあってそれに入れたのは全く恩ひがけなくて助かった。鮮人の恐怖はまだ全くは去らぬ由、購買の小僧とかゞ高砂で鮮人におそはれ、だましてその手を切ってやうやく逃げて来たとか、不安也。神よ守り給へ。其他社会主義や悪化した人々などの害のない様に祈るものである。神よ守り給へ。

9月5日（水）晴

夜来より朝迄微弱ながら地震あり不安未だ去らず。二宮父子は東京と横浜へ早朝に出立。蓁たち早くおきる。余はねむいのと心が沈むのとで皆よりあと迄ねている。おきてこわれた宅の方へ行く。蓁照子小林などこわれた家からいろいろ出している。下駄ズテツキ、洋傘など出る。八大山人は横堀が外へ出しておいた為めにぬれて汚れてしまったが助かると恩ふ。便所は二宮さんのがこわれていないので畫室より桜紙を沢山出したのではじめて心地よく便ありしかし少し下っていた。用心しないといけない。皆身体大切にしないといけない。神よ守り給へ。マサカヅさんの御父さんが東京から帰って来たのに会ふ。東京では社会主義者と労働者が事をなしているとか不安也。もしこの上日本が赤化でもしたら本当に自分等はどうしたらいゝのだらう。神よどうぞ御守り下さい。そしてどうぞ早く安全と幸福と平和と平常に帰らしめ給へ。二宮さんの仮宅に帰り休んでいたら茅ケ崎にいるといふ、宮坂金太郎といふ人が海岸つたひで来たとて見舞に来てくれた。人が来てくれる事ははじめてゞ又うれしかった。色刷会員であった由今広の息子さんの由なつかしく恩ふ。しばらく話して帰る。つかれと気の沈むのとで仮居に横になりうとうと

と眠る。日記帳や原稿紙万年筆其出たので日記つける。三十一日からついていなかった。この先の事不安也。神の守りにすがるよりない。神よ守りにすがるよりない。神よ守り給へ。夕方西洋かんの二階へ梯子かけてのぞいてみたらひどい散乱してはいたが、麗子のクレイヨンの帖面等出してやる。雨のもらぬ様にして帰る。

9月6日（木）晴

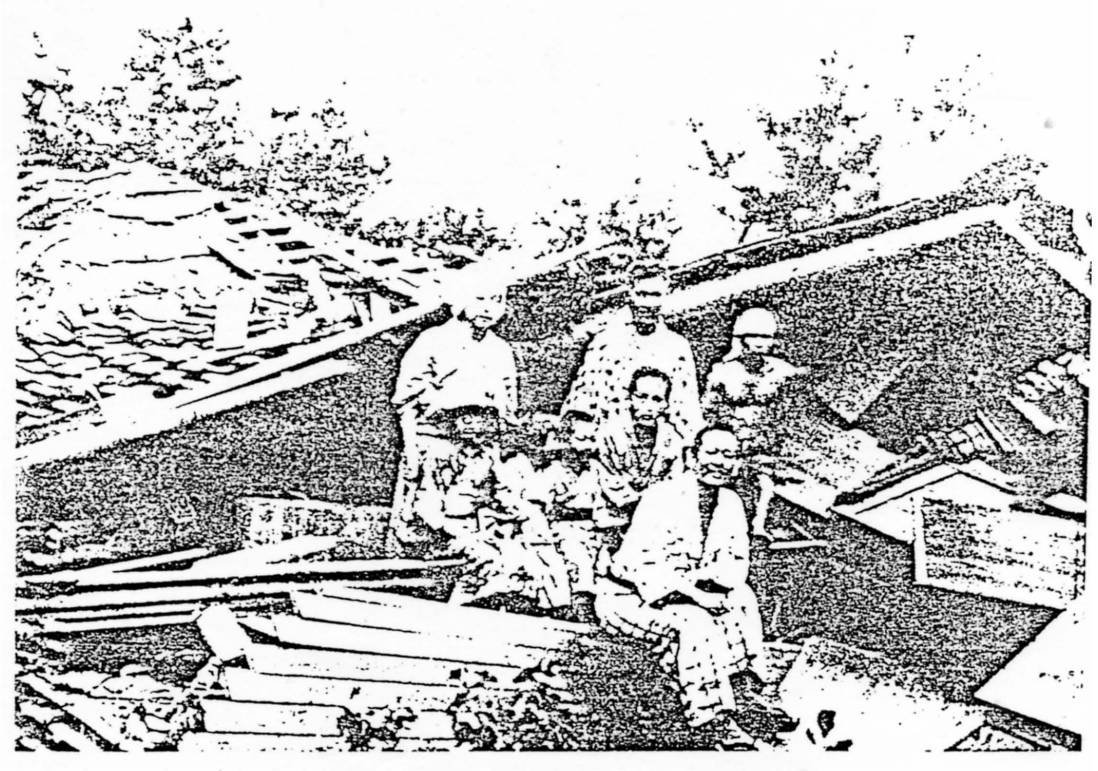
夜来地震度々あり、不安也。神よ守り給へ。七時過おきる。天気はよけれど弱き地震刻をおきてあり、何事もなき事を切に祈る。朝食は米飯と卵をいたゞく。ぜいたくの事也。午前蓁、沢田さんの妻君の妹（秋子さん）と同じく姪のつね子さん等と有田の方へ買ひものに出る。有田では怪我した人はあったが皆助かった由、よかったと恩ふ。洋食店の方はつぶれていたが八百屋の方は先づ助かっていて商売していた。赤いしょうが、平野水たくあん等買ふ。メリケン粉も一ふくろ四円十銭で売っている。横堀に会ふ。横堀は風邪を引いたとてどてらを着ていた。有田に体量器があったので体重をはかつたら十八貫二百強、三百目程へっていた。郵便局に行き為替の事聞いたら鵠沼局の払ひの分は当分駄目の由、何とかなるといゝと恩ふ。何しろ金が今は大切だ。この点も幸を祈る。神よ守り給へ。横堀も局の人と相談しているところであった。御ひるは芋のふかしたのであったが余はぬく。昨日より腹工合わるく今日は下痢也。この際の事とて、心配也。大した事のないのを祈る。皆の健康を切に祈るもの也。飛行器飛来、ビラをまいて行く。朝鮮人はもうおさまった由、安心也。軍隊出動ある由、感謝す。小林はともの家（二宮さんの親類）へ食料とりに行ったところ、郡役所で安く支給する由、ビラ等に

て食料等安心の由、大に安心す。午后にも時々地震あり無事を祈る。○午后松本さんで風呂を御馳走になる。松本さんでは主人と爺やさんとで五号の家をなほしていた。風呂から帰つたら二宮さんが横浜から帰ったところ。○遠雷時々鳴る。○今日は大分気持もおちついた。あゝ神よ守り給へ。○木村清宮等友人の事心配也。森川町へ行くという人ある由横堀に聞きとりあへず木村へ手紙をかく。○母（蓁の）姉たち子供たち銀坐の一家、弟たち、無事と早く幸福になる事を切に切に祈る。あゝ神よ僕たちと僕たちの愛するものたちの上に幸を守り給へ。

9月7日（金）晴強雨あり、

七時前おきる。昨夜も時々地震あり。地震とつなみの恐怖未だ全く去らず。無事を祈る。今日は、つぶれた家の中から先日出して雨にあって又入れたたんすの着物其他の道具を出し、畫室を片つて其処にしまふ事にする。道具を出して、畫室をかたづける。五号の山下さんの御主人が非常に働いて下さる。余裸になり帯を褌にして（下帯が出ないので）畫室に入ってゴタゴタになっているものを出し、落ちた壁を外へすてる。其中に雨が又ふり出したが次第に強雨になり、裸のまゝづぶぬれになって出したものを又畫室に入れる。蓁大こぼし也。蝶貝の戸棚や紫檀の机を二宮さん仮宅に運ぶ。ふとんが大部分出たがその一部を購買組合から自転車の後につけ車をかりてそれで運んだりした。沢田さんがやうやく帰って来る。やはり想像の通り、名古屋へ出て妻君をおいて御店の人二人つれて来られたのだ。大分気丈夫となる。広岡さんが購買やにて軍人とビールのんでいたのはうらやましかった。今朝早朝例の床屋が来て米は山口屋のわきで支給するから安心せよ、鎌倉に海賊あり皆用心せよと

ふれて行く。広岡さんに聞いたら海賊が来るといふのはうその由、かまくらにてつかまったものゝ由、どうか早く世が静まって又もとの様な平和な日月となり晝をかいて幸福にして行けます様、神よ御守り下さい。○二宮さんの御尊父、夜東京より帰らる。麻布よりの手紙持って来てくれる。皆丈夫怪我もなき由、大姉さんは其日店をやすんだ由、家は瓦一つ落ちない由聞いて大安心、深く深く神の御守りを感謝し奉る。銀坐の家、兄弟たち、友だち、それ等の家族皆の安全と幸福を祈る。夕方鵠沼の町の方へ歩いてみた。兵隊が来ていて米みそしょう油等売っていた。○朝の中片瀬の写真屋が通って購買組合を聞いたのでそれと分り、こわれた宅の前と二宮さんの仮居の前と、写真二枚づゝ写してもらった。



９月８日（土）晴、

早くおきる。昨夜は十八人この仮屋にねた。地震の（時々まだ地震あり、神よ守り給へ）不安もまだ去らず、蚊帳もせまいので、よく眠られなかった。今朝又下痢す。用心しなくてはと恩ふ。宮様は今朝九時に東京へ帰るとか、沢田さん大急ぎに支度して出かける。二宮さんの御父様かまくらへ行くといふので長与、園池、木下等の安否をたづねてもらふ蓁たちは道具の整理に宅の方へ行く。二階へ蓁が上がって軸をもっと安全なところにしまったりいろいろする。松本さんの主人が来て二三日中に大工が来てこわれた家々の材木を整理し小さい家を建てる由さうなったら畫室のわきに小さい家をたててもらつて当分鵠沼に住まうかと恩ふぬれたもの等干す。兵隊さんが二人来て沢田さんを求めていたが、沢田さんと家とに鑵づめの御のこりをくれる。余は今日はどうも又心が沈むので主にねころんで二宮君が持って来た正木不如丘の診察簿余白等を読んでみる。神よ守り下さい。四時頃横堀来訪。明朝四時小林と出発の由小林は点呼で帰国。余をのぞく他の人水爪などたべる。井戸（下水の）がこわれたが早くなほるといゝと恩ふ。玄関を少しこわしてやっと下帯にありつける。沢田さんは御宅の庭にほったて小屋を造っていられる。稲田さんを訪ねたら留守。購買組合では少し大仕かけに小屋を造っていた。夕方宅の前の道にいたら稍強い地震あり西洋館がメリメリと音してゆすれ、大地もゆすれた。恐ろしかった。無事を祈る。この西洋かんも大工が来てなほす迄どうぞ無事であって欲しい。そしてどうぞ無事落ちつき幸になる事が出来る様祈るものだ。神よ守り給へ。夜食後二宮さんの庭のテーブル（ビール樽）をかこんで二宮さんの御父様たちと話す二

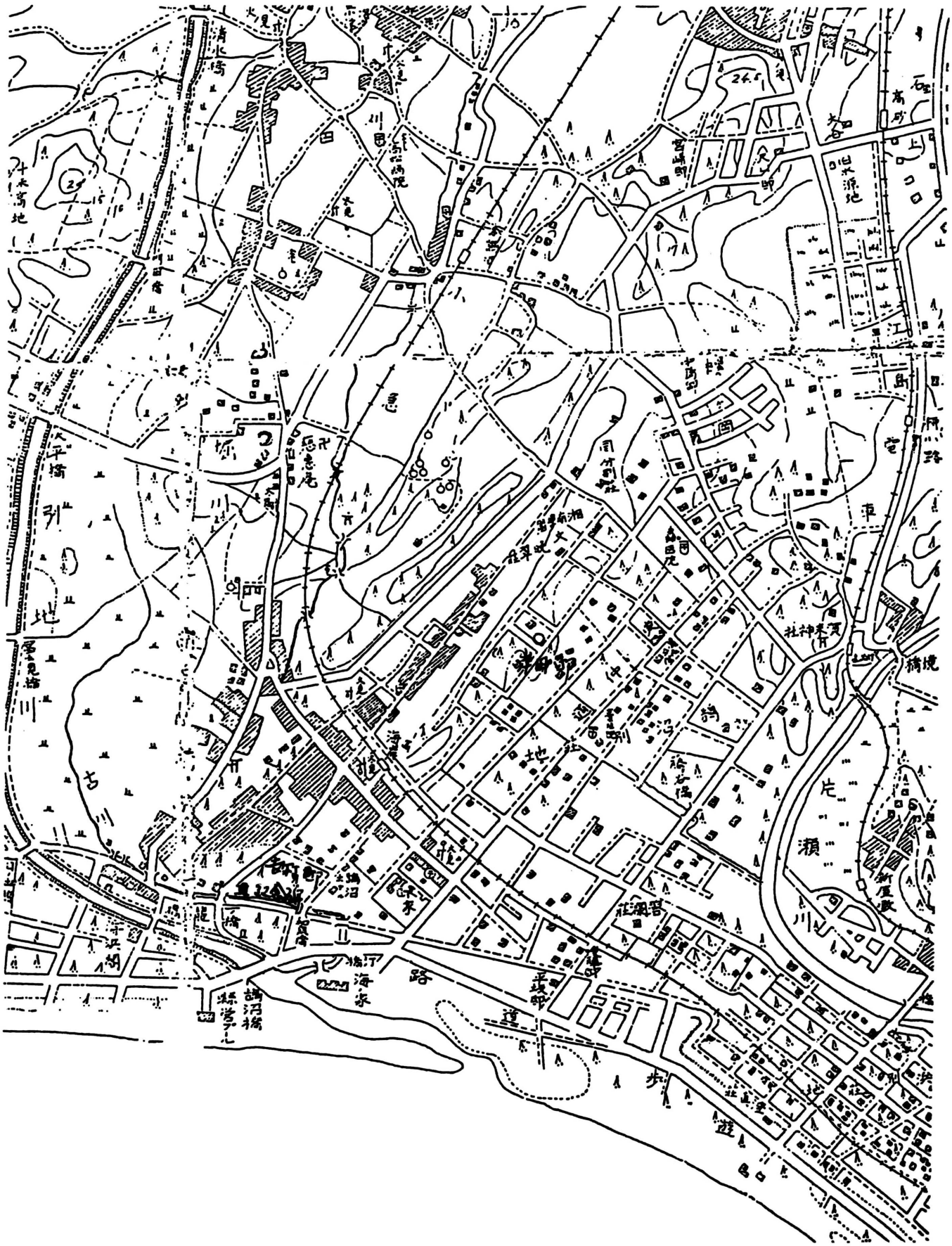
宮さんの御老人はかまくらに行かれたが、長与一家は旅行で無事園池木下も無事園池は家もつぶれぬ由、安心し感謝す。どうぞ猶愛する人々の上に無事と平安と幸福と幸運のめぐみを祈るものだ。神よ守り給へ。

○汽車は大船迄来ている由、但し一日四回にて乗るのに大へんにて、とても弱いものにはのれぬ由、さもあらうと恩ふ。

9月9日（日）好晴

地震は段々少なくなる。感謝する。小林は今朝未明に信州に出立す。沢田さんは自宅の庭に仮小屋をつくっている。蓁照子たちは道具の整理に松本別荘の宅へ、麗子はまさかずさんふみ子さんたちと遊んでいた。余は稲田吾山さんを見舞ふ。家はつぶれているが物置きを造って入っていられる。これから畫工は困るだらう等話す。博物館は焼けた等聞く。安全とも聞いていたが心配也。どうぞ無事を祈る。東京にあった古美術品の出来るだけ被害の少ない事を切に切に祈るものだ。どうぞ神様御守り下さい。岸田の兄弟たち親類、木村清宮其他の友の消息未だ知れず心配也。切に無事を祈る。神よどうぞ御守り下さいまし。畫室へ入れた布団を道に戸を敷いて乾す。仮居に帰ってねころんで、「女性」誌上の荷風の耳無艸などみる。この人も古美術を愛するらし。今の境地にてこの文をみて、かわける時水に会ふ様な心地幾分したり。山形さんのところの書生さんが東京から帰って、新聞を持って来たからと云って来たので出かけてよませて頂く。報知新聞也。東京は食料其他追々よくなるらし虎役発生の由あり、用心大切也。余少々腹工合のよくないところなれば大変心配なり神よどうぞどうぞ無事ならせ給へ。松本さんで風呂を頂く気持よし。仮宅へ帰る道にて町の方の床屋に会ひ、床屋の親たちが米を

半搗以上にして一俵ぐらい世話してくれさうなり。



鵠沼物語　（震災編抜粋）　今井達夫

私は９月１日には東京神田駿河台下にいて、鵠沼へ帰り着いたのは３日の夜だったから地震の最もはげしかった状態を直接体験したわけではない。すべて又聞きだが、岸田劉生の日記はその意味では貴重な資料である。

大正１２年９月１日関東一帯をおそった震災の鵠沼におよぼした変化影響は、想像を超えるものがあった。そしてそれは海岸地区に最も大きな被害をあたえ、大きな建物はすべて倒れてしまい、倒壊をまぬかれた小さなトタン屋根の貸別荘も、歪んで戸障子の開閉に不自由をかんじるほどであった。

多くの文人たちの利用した東屋旅館も、二階屋であっただけにつぶれ方も早く、修理再建して営業は復活したけれども、以前とわ大分変化してしまった。（中略）

転倒した国木田虎雄夫妻の面前で

東海道線の列車が転覆した

国木田は新妻が撮影所へ出勤するのと同道で上京すべく出かけ、途中で地震に合ったという。それは東海道線を目の前に見る地点であった。突然はげしい衝撃をうけたふたりが思わず抱き合って倒れると、視野にはいって来たのは下り列車の転覆する光景だったという。ふたりは起き上るといそいで原部落の部屋にもどって来たが、幸い納屋のその部屋はすこし傾いただけ母屋の方は無事だったので、まず私の家へ駆けつけたその途中、本村から海岸地区にはいると、大きな家はみんな潰れているのを見て、列車の転覆がはずみで起こったわけでないこと、これは容易

ならざる椿事と悟ったという。こんどこそ大変なことになった実感がわいて来た。その不安が彼をして私の母や妹達を彼の部屋へ誘わせことになったのだが、私の母に云わせると、それは有難い誘いだったのである家は潰れたあとで、庭の松の木のあいだの草むらでどうしていいか途方に暮れていた時だった、とにかくうちへ来ませんか、国木田が頼もしく大人に見えたが。夫婦とも外出の装いをしているのが異様な印象だったと、のちに震災話が出るたびに私の母は笑った。（中略）翌日になると出入りの者の世話で空いている貸し別荘に住むことが出来た。

八百徳、番場徳太郎は私の家について大いに働いてくれ、２日の日には潰れた茅葺屋根を掘って、台所の品物や布団、蚊帳まで探し出してくれたので、とにかく一応日常生活の形がととのったのである。３日の晩たどり着いた、（中略）国木田に逢ったのは４日の日で母から世話になったことを聞き母屋の人達にも礼をいうために出掛け様としていると、国木田の方からやって来た。国木田は東京で震災にあった母（独歩未亡人）や妹のみどりの安否を気遣って、私の話す東京の模様に呼吸を詰めていた。ずいぶんたってから、この二人は無事だったとわかったけれども、新聞は出ないし電話も不通だった数日間の私達は、まったくのつんぼ桟敷におかれた不安に身をまかせるより仕方なかったのである。

「江の島が沈んだ」の記事を読んで

私は海岸まで走っていた

私が３日の晩鶴沼へ帰り着くまでの経路を簡単に記しておきたい。神田駿河台下で地震を感じことは前述の通りだが、そのとき親戚のふたりの受験準備生を伴っていた私は、いそいで九段坂上へ逃げたが、その

時はすでに下町方面の方々に火の手が上っているのを身なければならなかった。市内電車は停電のため所どころで立往生していたから、それから推して省線電車はダメだろうが汽車ならば動いているかも知れないと新橋駅へ向ったところ、日比谷公園の手前の電柱にどこかの新聞の号外が張ってあるのが目にはいった。それによると、横浜、湘南地方の被害甚大とあり、交通のダメな事も分かった。私は年下の従兄弟達を連れて渋谷の伯父の留守宅へ向った。この二人を横浜の親戚へ届け無ければならない責任が、私にあった。

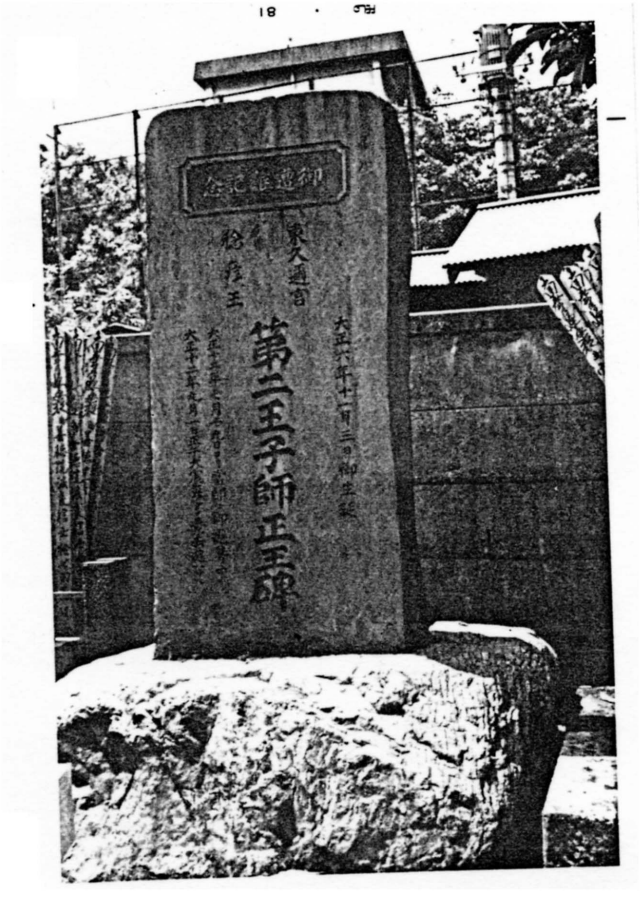
その晩はその家に泊まったが、地震による被害は殆どなく、火災による被害がなければ東京は軽く住んだであろう大正１２年９月だったのである。２日は昼すぎまで模様を見て、逗子に妻子を避暑にやある年長の従兄弟と同道で出立し、横浜へとどける年下の従兄弟達と品川で別れたが東京でも、２日の午後には朝鮮人騒ぎが始まっいた。その晩は大井町の友人の家に泊り、３日六郷の橋の所まで相乗りのタクシーに乗った。一人１０円という法外な値段だったが、（中略）鶴沼へたどり着いたのだから東京の下町の様相については全く無知識だったのである。無知識といえば、鶴沼のうけた被害に就いてもごく一部分の知識きり持ち合せのない私であることに、その日鶴沼に誰がいたか、もしくは、いなかったか。横堀角次郎が中屋にいて岸田家へ駆けつけたことは「絵日記」が教えてくれるが、その中屋旅館にほかの誰がいたのか、また東屋で被災した文人画家がいたのかどうか、私は全然知らないのを訝かしく思うほどである。

知っているのは、国木田が毎日やって来て心配を訴えた、その憂い顔

が５０年たった現在でさえ目に焼きついている、その記憶を中心にした範囲にとどまっているくらいなものである。彼が辻堂の中村武羅夫の「辻堂御殿」へ見舞に行ったかどぅか、その家はどんなことになっていたか、武羅夫はどんな感想を洩らしたか、それらを一切おぼえていないのは、自分では家族の安全だったのを知って平静をとりもどしたと思ったのが間違いで、やはり相当期間取り乱していたに違いないと顧みる現在である。そして、平常心を取り戻していなかった証拠には、そぅいう大事なことを忘れたか、おぼえていないか記憶に影さえ落していないのに反して、つまらない事実はその姿をまで目にきざみつけていることである。一週間ほど立って初めて配達された群馬県か栃木県かの新聞に江の島海中に陥没という特号活字の記事が出ているのを見て、懸命に海岸まで駆け出したのは、滑稽至極で大笑いの材料になった。行って見ると、江の島は陥没どころか幾らか高まって依然たる「緑の江の島」の健在を示していた。そして、「いくらか高く」は目の誤まりではなくて、事実隆起したのであった事が追い追いわかった。そんな例があった。

震災で家が潰れのは海岸地区がもっとも多く、全死者は６０人を超した。その死者たちを処理するには火葬場の設備が足りないので。海に近い小松林（大曲り）で焼くことになった。年間ずっと住んでいる大学生といふので私は立合人になることを求められ、砂地に穴を堀りその上にトロッコの線路を並べてあるその臨時火葬場へ行った。むしろで包んだ死体をその線路の上に置いて火をつけるのである。その頃には、東京横浜での焼死者の噂が伝わつて来ていたので、あまりこの臨時火葬場からつょい衝撃はうけなかったが、だまって眺めていると生死の別れと云も

のを実感で感じないわけに行かなかった。９月１５日に横浜市外生麦の親戚の別荘のはなれへ、私たち一家は一時仮住居まいする事になり鶴沼をはなれた。（以下略）



地震災年表（神奈川県内主に）

年号	西歴	被害状況
1,孝安年代		富士山出現するという。伊豆諸島噴火あり。
2,孝霊年代		琵琶湖・浜名湖生ずという。富士山噴火する。
3,欽明13年	552	江の島出現するという。
4,延歴19年	800	富士山噴火し、火山灰が足柄路埋める。
5,弘仁 9年	818	相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等諸国地大に震い山崩谷埋り百姓死すもの算ふべからず。
6,元慶 2年	878	9 月29日夜地震関東諸国・相模武蔵・　特尤甚其後5,6 日震動未止・或地陥・往還不通・百姓圧死
7,仁和 2年	886	伊豆諸島に火山活動あり。
8,応徳 2年	1085	三宅島噴火する。
9,天永 1年	1110	八丈島噴火し５年続く。
10,久寿 1年	1154	八丈島噴火する。
11,文治元年	1185	6 月20日夜半大地震。（吾）
12,建仁 2年	1202	1 月28日卯刻大地震。（吾）
13,元久元年	1204	10月6 日亥刻大地震。（吾）
14,承元 2年	1208	1 月6 日午刻大地震。（吾）
15,建歴元年	1211	1 月27日寅刻大地震今朝日無光陰　其色赤黄色 7 月3 日酉刻大地震　牛馬騒警。（吾）
16,　　3年	1213	1 月1 日鎌倉大地震　堂社破れ倒れる。（吾）
17,建保元年	1213	5 月21日午刻大地震　山崩地裂。（吾）
18,	1213	7 月7 日丑刻大地震。（吾）

19,　　1213　8 月19日丑刻大地震。（吾）

20,　　1213　9 月17日甲申　陰大地震。（吾）

21,　　1213　12月11日陰　午刻大地震。（吾）

22,　　2年　1214　2 月1 日寅刻大地震。（吾）

23,建保 2年　1214　4 月3 日亥刻大地震。（吾）

24,　　1214　9 月21日亥刻大地震。（吾）

25,　　1214　10月6 日亥刻大地震。（吾）

26,　　3年　1215　6 月20日今夜子刻御霊社鳴動三度。（吾）

27,　　1215　9 月6 日丑刻大地震。（吾）

28,　　4年　1216　6 月11日亥刻大地震。（吾）

29,貞応元年　1222　7 月23日未刻大地震。（吾）

30,　　1222　11月1 日子刻大地震。（吾）

31,　　2年　1223　5 月12日申刻大地震。（吾）

32,　　1223　9 月26日戌刻大地震。（吾）

33,元仁元年　1224　6 月1 日子刻大地震。（吾）

34,嘉禄元年　1225　10月11日子刻大地震。（吾）

35,　　2年　1226　4 月27日未刻大地震。（吾）

36,安貞元年　1227　3 月7 日戌刻大地震所々門扉築地等顛倒又地割。

37,　　1227　9 月3 日丑刻大地震。（吾）

38,　　1227　11月6 日酉刻大地震。（吾）

39,　　2年　1228　5 月15日戌刻大地震。（吾）

40,寛喜元年　1230　12月19日亥刻大地震依地震初行御祈等。（吾）

41,　　2年　1230　1 月22日酉刻地震大慈寺後山崩。（吾）

42,嘉禎元年　1235　3 月9 日亥刻大地震余震多し。（吾）

43,　　3年　1237　8 月4 日辰刻大地震。（吾）

44,歴任元年　1239　11月1 日寅刻西方雷電数度午刻以後震動。（吾）

45,　　1239　11月12日午刻大地震。（吾）

46,仁治元年　1240　2月22日卯刻鶴岡新宮寺無風顚倒北山崩。（吾）

47,　　2年　1241　2月7 日巳刻大地震（吾）

48,寛元元年　1243　5月23日天斉　子一天大地震。（吾）

50,　　4年　1247　11月27日寅刻大地震。(吾)

51,寛治元年　1247　10月8 日卯四点大地震。(吾)

52,　　1247　11月26日丑一点大地震。(吾)

53,建長 2年　1250　7月18日国刻大地震　其後小動十六度。(吾)

54,　　5年　1253　2月25日午刻大地震　龍神動。(吾)

55,　　1253　6月3 日大地震。(北条九代記）（武家年代記）

56,　　1253　6月10日未刻大地震近年無比類又小選而小動一両

57,　　6年　1254　7月18日酉刻大地震。(吾)

58,正嘉元年　1257　5月18日子刻大地震被尋下之処晴茂朝臣兄弟七人連署勘悪動之旨　広賢申吉動之由。（吾）

59,　　1257　8月1 日戌刻大地震。(吾)

60,　　1257　8月23日戌刻大地震有音　神社仏閣　一字無全人屋顚倒　築地皆悉破損　所所地裂水湧出　中下馬橋辺地裂破　自其中火炎燃出　以下略。（吾）

61,文永 3年　1266　子刻大地震。(吾)

62,正応 5年　1292　大地震　被打殺者1,700 余人。（鎌倉大日記）

63,永仁元年　1293 大地震建長寺　依地震顛等剰一寺焼。（鎌倉大）

64,嘉元 3年　1305 鎌倉大地震（続史愚抄）大地振。（武家年代記）

65,徳治元年　1306 3 月2 日関東大地震.(一代要記)

66,正和 5年　1316 7 月23日此日鎌倉大地震自去月20日連々地動。

67,元享 3年　1323 5 月3 日未刻大地震.(武家年代記)

68,延元 3年　1338 伊豆大島噴火する。

69,興国 2年　1348 3 月8 日大地震.(鶴岡社務記録)

70,　4年　1343 4 月15日丑卯　両度大地震.(鶴岡社務記録)

71,　1343 5 月6 日寅刻大地震.(鶴岡社務記録)

72,応永22年　1415 伊豆大島噴火、海水沸騰する。

73,　23年　1416 伊豆大島噴火する。

74,　27年　1420 8 月10日鎌倉大地震十七度.(神明鏡)

75,永享 5年　5 月21日午刻大地震.(鎌倉大日記、南朝記伝)

76,　1433 8 月16日鎌倉大地震.(大乗院日記目録)

77,　1433 9 月16日今夜大地震両度　帝尺動也　堂舎顛倒人多死　八幡宮　金灯炉焼失　10月26日条　鎌倉築地崩　極楽寺塔九輪落　惣唐物共多損　大山仁王頸落　前代未聞也。（神明鏡）

78,　1440 9 月18日大地震.(南朝記伝、鎌倉大日記)

79,嘉吉 2年　1442 伊豆大島活動初める。

80,享徳 3年　1445 12月10日大地震.(南朝記伝、鎌倉大日記)

81,明応 7年　1498 8 月25日震災鎌倉地強く震い次いて津波押寄せ、大仏伝の堂を破り、溺死者200 余人「明応地震」

「伊勢　紀伊　遠江　三河　駿河　甲斐　相模
伊豆諸国地大に震い、瀕海の国津波の害を蒙り、
伊勢国大湊にては家千軒押し流され5000人溺れ死

81,永正 7年　1510 春八丈島大地震。

82,大永 5年　1525 5 月23日鎌倉大地震　由比浜の川入江沼皆震埋て
平地と成　27日迄昼夜の地震也（塔寺八幡宮続）

83,永緑 3年　1560 富士山噴火する。

84,慶長 9年　1605 12月16日相模両国地大震　海浜溢溺死者多26日武
相二州又震　発酉昼俄闇。（続本朝通鑑）

85,　10年　1606 八丈島近海海底噴火あり新島を生ずる。

86,　19年　1614 10 月25日小田原御泊　此日地震（慶長見聞書）
太陽色赤くなり数日続く。

87,寛永10年　1633 1月21日明方七つ半大地震相州小田原強震　民家
数千間倒　其後毎日度々地震　同26日申　人多死
小田原之町　一里之内家一ッもなし（江城年録）
湧出泥水　往還旅人宿原野　「小田原地震」

89,　14年　1637 伊豆大島噴火する。

90,　19年　1642 三宅島噴火する。

91,　20年　1643 三宅島噴火する。

92,正保 4年　1647 武蔵相模両国地震うこと強く、江戸城壁及馬入川
渡船場等破壊し、東叡山金造大仏の頭揺落せり。

93,慶安元年　1648 4月22日大地震　相州小田原の坂をゆり崩す、小
田原城崩れ小田原領所々潰る家多。（続史遇抄）

94,　　3年　1650　3 月23日関東諸州大地震。

95,貞亨 1年　1684　伊豆大島　　三宅島噴火する。

96,元禄 1年　1688　富士山噴火あり。

97,　　10年　1697　10月12日相模地震　鶴岡八幡鳥居倒れ、(元禄)

98,　　13年　1700　富士山噴火する。

99,　　16年　1703　11月23日武蔵相模　安房　上総の諸国地大に震い震い　江戸　小田原被害甚し続いて津波襲来し小田原鎌倉の沿海　　安房の長侠　震災全般を通潰家20,162軒　死者5,233 人達す「 元禄地震」

100,宝永 4年　1707　11月22,23 日富士山爆発頻繁23日南東山腹大爆発五畿七道に亘り地大に震い　続いて九州南東部より伊豆に至るまでの沿海の地は悉く津波の襲ふ所となり震災地を通じ　潰家29,000戸、死者4,92人「宝永山ができる」(宝永地震記)

101,亨保14年　1729　伊豆南部強震、津波あり。

102,安永 7年　1778　伊豆大島噴火しその音遠江で聞こえる。

103,天明 2年　1782　7 月14日江戸地強く震い　明朝数々震ふ　是時相模国最も烈震を感じ小田原城破壊。(泰平年表)

104,　　6年　1786　伊豆大島噴火する。

105,　　2 月23日箱根山　鳴動して地強く震ひ　二子の山崩れ　蘆湯底倉等の湯治場所へ大石落人家多く破損。伊豆大島噴火する。(後見草、天明記)

106,寛政 4年　1792　江戸地震あり、富士山落石死者あり。

107,文化 9年　1812　11月4 日江戸及近国　大地震　神奈川　保土ヶ谷辺殊に甚く民家破倒。（泰平年表）

108,文政 5年　1822　伊豆大島噴火　文政７年まで続く。

7年　1824　伊豆新島噴火する。

109,　8年　1825　8月20日相模大山崩壊し　家屋埋没し死傷あり。

110 天保 6年　1835　富士山震動する。

111,　14年　1843　2 月9 日江戸地震強し是日小田原地強く震ひ城廓破損せりと云う。（大日本府県誌）

112,天保年間　伊豆大島噴火する。(1834-16)

113,嘉永 6年　1853　小田原大地震あり。

114,安政年間　1854　「安政東海地震」「安政南海地震」資料略

115,明治27年　1894　6 月20日関東南部を中心強震震度６横浜・川崎地区被害あり。安政江戸地震以来の烈震という。

116,　28年　1895　10月11日関東に震度４横浜港内被害あり。

117,　42年　1909　3月13日横浜地方煉瓦壁の崩壊等震度４。

118,大正 7年　1918　6月26日津久井郡地裂石垣土蔵壁の崩壊震度４。

119,　11年　1922　4月26日東京湾沿岸地方で被害多し。震度５。

120,　12年　1923　9月 1日関東大地震、震度６Ｍ7,9 。資料略

121,　13年　1924　1月15日相模地震　旧厚木町、藤沢町、戸塚町を結ぶ地域内は建造物破損、最強震度５。

122,昭和 4年　1929　7 月27日神奈川県全域震源丹沢山付近。震度５

123,　5年　1930　11月26日北伊豆地震丹沢盆地を中央を貫く南北に走る断層地塊の活動による。震度6 Ｍ7,0

東久邇宮・第二王子師正王

関東大震災遭難記念碑見つかる

「関東大震災」（一九二三年九月一日）の折、元皇族の東久邇宮（終戦直後の首相）ご一家が、藤沢市鵠沼海岸の別荘で避暑中、建物が倒壊して、第二王子の師正王（当時六歳）をなくされた。その遭難記念碑が、一時行方不明となっていたが、このほど、東京のお寺に安置されているのが同市鵠沼海岸三の一二の三三、会社役員塩沢務さん（六三）の調査で分かった。塩沢さんは、同市内への移転設置の運動を進めるという。

塩沢さん（円内）と東京のお寺で見つかった遭難記念碑

東京の寺に安置

防災資料作りの塩沢さんが確認

師正王が遭難された時、近所の自警団の人たちが、津波の恐れがある中を、ご一家を収容したり、おにぎりを配るなどした。また、王子の仮埋葬もしたという。

これに対する感謝の気持ちとして、宮家から当時の金で千二百円が贈られた。

震災一年目に、写真のような高さ一・八メートル、幅八十センチの碑が立てられたが、さる三十二、三年ごろ行方が分からなくなった。

国立防災科学センターの「東海地区地震津波資料一の〝神奈川版〟を作成するため、古文書などを収集していた塩沢さんが調べているうち、別荘の元地主のほだい寺、東京都港区白金四の二の三、本妙寺の墓地にひっそり立っているのを見つけた。

塩沢さんは「関東大震災の事実を示す貴重な遺産だ」といっている。

県下の交通事故

29日午前零時―30日午前零時（カッコ内は①今年の累計②昨年同期比）

▽件数八〇件（①一五〇八件②六七九件増）

「鵠沼」平成元年９月５０号

平成元年　９月１１日発行

《藤沢町，震災誌　鵠沼編》

◎（学習用印刷部数３５部）

発　行　所　　鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話33-2001

編集鵠沼を語る会　代　　表

塩　沢　務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電話36-7876